

11. 京都市野邊地家文書調査

東 昇

1. 概要

野邊地家文書は京都市の野邊地家に伝来した文書群である。2019年12月、文化情報学研究室の卒業生である所蔵者が本学教員東昇へ相談を行い、府立大へ搬入された。文化情報学研究室では2019年12月から文化情報学実習等において同文書群の調査を実施している。

調査参加者 東昇（教員）、安江範泰（博士前期課程修了、現：郡上市歴史資料館）、北原美咲、鈴木詩織、藤原あかり、吉富絵音（以上、4回生）、井上泰良、今関航士朗、武田知奈、谷澤洋祐、渡邊幸奈（以上、3回生）他

2. 内容

野邊地家文書は段ボール1箱のなかで、木箱・紙箱・封筒などに分類されている。内容は、近世から近代の文書・写真からなり、近世は盛岡藩士野邊地家、幕末～明治前期の野邊地尚義関係、近代は家政文書を中心に、野邊地久記の文書が含まれる。野邊地家は「野辺地氏系譜」によると、奥州北郡野辺地（現青森県野辺地町）の城主下野弟の野辺地安芸守から始まり、南部氏の支流とある。盛岡藩士時代の文書は、享保期、幕末期が多く、享保13年（1728）5月28日「被遣新田野竿高証文」では、藩は野辺地弥惣兵衛に対して、岩手郡鶴飼村（現岩手県滝沢市）内6石新田の願を許可し、計50石の軍役勤を指示している。

野邊地尚義は、文政8年（1825）生、嘉永期の江戸詰の際に脱藩し、大村益次郎の門下となり、長州藩で蘭学を教え木戸孝允や伊藤博文の知遇を得たとある（『大日本人名辞書』1909）。明治になり京都に移り、明治3年（1870）京都府が設置した府立英仏独三語学校、明治5年設置の女紅場の専務として従事した。その後東京へ移り、明治14年芝公園にあった社交場紅葉館の代表社員として経営にあたり、明治42年死去した。

息子の野邊地久記は、文久3年（1863）京都生、尚義の養子となり、明治15年工部大学校土木学科を卒業、同助教授となり、アメリカに留学した（『大日本博士録』5、1928）。ペンシルバニア大学を卒業、明治21年九州鉄道会社の技師長、タイの鉄道技師となり、明治28年工科大学教授を勤めた。震災予防調査会、大阪築港設計委員などを歴任し、明治32年死去した。専門は、土木工学、特に鉄道工学であり、明治16年には『アプト式鉄道建築法』を著している。久記の息子三郎は、岩手県立盛岡農学校教諭であり、関連写真が含まれている。

現在は箱の現状記録、番号付与と、一部の文書の写真撮影、目録作成が終了している。今後は引き続き調査を実施する予定である。

編集後記

フィールド集報は、刊行当初より Adobe 社の InDesign を利用して組版作業を手作りでおこなっている。InDesign の取り扱い、歴史学科文化遺産学コースのうち、考古・建築・地理の実習メニューに含まれ、本書の一部については、そうした実習のなかで学生が組んだものとなっている。

今年度のフィールド調査においても、各地で多くの方からのご理解とご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げる。歴史や文化遺産にかかる調査は一人では決して成しえないということを、今後も常に意識するように努めたい。(う)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第9号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2023年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
